



第十九号 「食も芸術 ～私のランチ③～」

3ヶ月にわたって読者様にお届けした～食も芸術～の3回シリーズも、今回でおしまい。今企画は編集部も楽しく（そして美味しく）取材をさせて頂いて、これで終わってしまうのかと思うとちょっぴり寂しい気も致しますが、その分、3回目の今回もしっかり取材をして、良いメルマガに仕上げゆく務めを果たしていきたいと思えます。さて、シリーズ結びのゲストは邦楽囃子方・望月<sup>たざえ</sup>太左衛先生をお迎えました。囃子方と箏曲（特に生田流）は音楽上の接点が殆どありませんが、太左衛先生と雅楽之一は以前からしばしばお付き合いがあり、「色々ご助言を頂ける、大切な先輩のお一人です」という、親しいご関係なのだそうです。お会いしてみると、キリッとした御容姿からは意外なくらいに、気さくで、茶目っ気たっぷりの太左衛先生のお人柄。私たちはあっという間に、先生の魅力に引き込まれてしまいました。

望月太左衛。歌舞伎囃子方の名家、十代目宗家元・望月太左衛門を父とし、昭和五八年に東京芸術大学研究科大学院を修了。平成六年に歌舞伎座で二代目・望月太左衛を襲名し、以降国内外で音楽活動、普及活動に尽力。その他後進への指導、フェスティバルの主催、演奏会の企画、最近ではNPO法人を立ち上げるなど、その活動力はここに書き切れない。又、平成十五年には東京芸術大学大学院博士課程に入学し、見識者としても一流を極め、名実共に女流の囃子方の第一人者となっている。

十二月吉日。お約束の場所は東銀座。せっかくなので銀座の象徴いわゆる、四丁目交差点から三原橋まで歩いてみることにした。間もなく取り壊しとなる三原橋地下街、前方には来年四月に完成する歌舞伎座。銀座の街も時代の流れに応じて大きく変貌を遂げた。目的のお店は、この三原



橋交差点付近にある。交差点から昭和通り沿いに四件目、

歌舞伎座から目と鼻の先に構える『Cafe Juliet』。表は全面ガラス張りの、印象的な赤い屋根。どこことなくパリを連想させる佇まいである。そんな雰囲気似合わない(?)かもしれない、二人の対談がはじまった。

奥田：「先生、おはようございます」

望月：「お元気でした？」

奥田：「はい！お陰様で」

望月：「昨日、眠れなかった、緊張して」

奥田：「大丈夫ですって！」

望月：「真面目にやりま〜す」

奥田：「はい(笑)よろしくお願ひします」

### お囃子の名家に生まれて

望月：「ウチは囃子の専門をしております。父は…」

奥田：「十代目・望月太左衛門先生」

望月：「はい。でも、私芸の方はどちらでもよかったです」

奥田：「そうなんですか？」

望月：「歌舞伎の世界は基本的に女性は関係ない世界なので数の内に入ってません。別に囃子はやらなくても…そういう感じでした」

奥田：「ご興味がなかった？」

望月：「興味がないのではなくて、自分は本当のことをいうと、やってみたいなあと思っていました」

奥田：「お稽古は、正式にお父様から受けられた？」

望月：「見て覚えるという世界なので、きっちりお稽古というのはいくつかありません」

奥田：「お父様が亡き後、望月太左衛門の名を襲名なさったのは双子の弟様(長男)ですね。弟様方もお稽古というのはいくつかありません」

望月：「彼らも若くしてこの世界に入りましたが、昔から手取り足取りではないですけれども、アドバイスをもらいながら、実地の中でお稽古という風にしていました」

奥田：「女性でいらつしやる先生が、紆余曲折あつてこの世界にお入りになったということは、何かその、きつかけみたいなものが？」

望月：「そうですね…、真剣にやろうと思ったのは、この前亡くなられた(中村)勘三郎さん。この方が勘九郎時代に清元・三社祭という踊りを(中村)歌昇さん(現・中村又五郎、当時・光輝さん)とお二人で踊つてらつしやるのをテレビで見ました。その時私が高校生で、一つ年上でいらつしやつたんですけど、すごいと思つたんですね。私と一つしか違わないのに、こんなにテレビを通してでも感動する芸をする方がいらつしやるんだな。すごいびっくりしまして。そのとき初めて、本物の芸を目指す方が同世代にもいらつしやることに気が付きました」

奥田：「真剣に勉強しようと思いつて、まず、どういう方法をとられたのですか？見て覚えるというお家柄の世界から」

望月：「実際には、(父の叔母さん、祖父の妹)望月初子にお稽古を」

奥田：「へえ。そうだったんですね」

望月：「その叔母さんが女流で活躍しておりましたので、まず私はその富沢町のお稽古場に行きました」

奥田：「お稽古場といえば、先生の活動の拠点は、浅草でよろしいですか？」



望月：「実は生まれが中央区・浜町。そのあと、四ツ谷に  
おりました。御宅（正派邦楽会館）のご近所です」

奥田：「あら、そうだったんですね。その後、浅草に移ら  
れた？」

望月：「父が亡くなってから。お弟子さんも沢山いるし楽  
しいかなと思って、母の生まれた浅草へ」

奥田：「そういえば、以前、市ヶ谷の正派の坂の下に時々  
いらつしやっていたというお話をしましたね」

望月：「あれはですね、能楽・大鼓の安福雄先生のお稽  
古場がマツクの上にあつて。能舞台もあるんです」

奥田：「えー！あそこに能舞台が？」（これには編集部も  
ビックリ）

望月：「ダンス教室があつて、その上に能舞台！そこがお  
稽古場だったですね、先生の。そこに通っていました。マ  
ツクで覚えなおしをよくしました（笑）」

奥田：「それは知りませんでした。驚きました。先生はお  
勉強熱心で、その後、芸大の博士課程までいらしたのです  
よね？」

望月：「えーと、修士課程を修了してから、中二十年以上  
空いています。はい」

奥田：「大学に行こうと思つた理由を伺つてもいいです  
か？」

望月：「女性である私は、芸をやらなくてもいいよつてい  
う環境だったので、自分は学校に入って、研究者とか評論  
家とかそういう道ならいいかもしれないと考え、特に民族  
音楽学の小泉文夫先生の授業を受けたいと思ひました」

## ジュリエとの出会い

奥田：「先生、ところで、肝心のお店の話を全然してませ  
んね」

望月：「あ、そうだった！ごめんなさいね」（笑）

奥田：「（笑）。このお店はいつから？」

望月：「2年前！」

奥田：「えっと、先生は確か最近、浅草からこちらに引ッ  
越してきたんですね？」

望月：「はい。今の住まいは、新橋演舞場の裏の方です」

奥田：「じゃあ引越してからこちらに来るように？」

望月：「そうです」

奥田：「おつ、きたきた。ハヤシライス、カレーライス、  
エビドリア：ですね。うわつ、どれも美味しそう。さあみ



んな、どれにする？」

望月：「ハヤシライスは3日間煮込んで、美味しいです  
よ」

奥田：「え、じゃあ僕ハヤシ（笑）」

一同：「（笑）」

奥田：「あつ。シンプルでいい。美味しいです」

編集部：「ドリアも一口食べて下さい」

奥田：「うん。あ、熱い！」

一同：「（笑）」



奥田…「美味しいです、先生」

望月…「よかったあ、マスターもママも喜びます！」

奥田…「このお店に来るようになったご縁は？」

望月…「セミナーをずっとここでさせて頂いてるんです。歌舞伎座が取り壊しになって、私、個人的には非常に納得いかなかった。毎日毎日、あそこで音が鳴ってたわけじゃないですか。それがパタッとなくなってしまうのは寂しすぎると思って、それで何かセミナーみたいなことが出来な

いかなあと捜していたんです。そうしたらこちらのママがね、奥にある会議室を貸してくださるということになったので、月一回セミナーを」

奥田…「へえ」

望月…「ここでトントンを音を出しているのよ」

奥田…「(笑) いいですね。セミナーでは具体的にどのようなことをなさるのですか？」

望月…「例えば、歌舞伎の鼓・太鼓などの囃子について紹介して、さあ皆で体験しましょう、トントンをみたいな感じですよ」

奥田…「どのくらいの期間なさったんですか？」

望月…「一年間ほぼ毎月やって、今年がちょっとできなかったもので、これからやらないと思う」



て、来週(十二月二十一日)十五回目のセミナーとしてクリスマスミニ発表会…えっと…チラシが、これです」

奥田…「へえ。(チラシを見ながら)楽しそう。僕も行きたいです。歌舞伎座の代わりに…ですか。それでこのお店を選ばれたのですか」

望月…「この辺は、会議室とかあっても音が出せないところばかりで、それで捜して捜して」

奥田…「歌舞伎座が建て直しになったことが大きく影響を？」

望月…「大きいですね。やっぱりすごいショックだったの。今は、見慣れましたけど、最初はね」

奥田…「僕もそうなんですけど、子供の頃にあの歌舞伎座で遊んだっていう思い出が…。独特の空気というか匂いがあるのですよね」

望月…「そうそう、そうなの。あの感じがなくなっちゃうというのは、ショックで、だから何かやらなくてはいけないと思ってこちらでやらせていただくように。歌舞伎座がなくなるのはしょうがないですが、新しい歌舞伎座に新たな期待をしつつ…」

実は…

望月…「実は私、五十歳になったのをきっかけにお筆を始めたんです」

奥田…「ほっ！初耳ですよ！どちらですか？生田ですか、山田ですか？」

望月…「初耳？だって、言いづらい。でも痛い、押し手が痛い！お家(正派)のほうのNPO傘です」

奥田…「麻井さん？」

望月…「そう。おもしろいでしょ。私はすごく麻井紅仁子先生の影響を受けていて…普及用の楽器ってどうしてるんですよ。私も今エゴ鼓、エゴな鼓を開発中なんです。本当に麻井先生に随分勇気付けられた。今度見せます！麻井先生は、いつも自分はお家元のおかげでこういうことをさせていただいていると毎回おっしゃっています。(前回のメルマガゲスト)萩岡先生には随分箏曲の囃子を勉強させていただきました。お筆っていうのは自分の中にはないものがたくさんあると思っていたので、五十の手習いで思い切って始めてみたわけです」

奥田…「恐れ入りました(笑)」

望月…「あの、靖子先生作曲の《笛吹き女》って、正派の人じゃないと演奏してはいけないんですか？」

奥田…「いえいえ、そんなことはないですよ。むしろ、外の人にもやって頂くことに意味があるんじゃないですか？」

望月…「あ、安心しました。自分が一生の内にチャレンジしてみたい曲というのが、私、幾つかあるんです」

奥田…「大いにやってください！作曲家としては、一人でも多くの人に弾いてほしいというのが本音じゃないでしょうかね。そうしないと、普及していきませんか？」

望月…「そういう曲がいくつかあるんですけど、例えば《信楽狸》もそうなんです。何回か小鼓打たせていただいたことがあって、本当はこうじゃないのではとか、色々



わかんないんです。お箏が弾けたらもうちょっとわかるかなって。あと、尺八が吹けたら、もうちょっとわかるかなって…」

## お囃子を身近に

奥田…「先生の今の活動の主は、ご一門の方々とご一緒に？あの、先生がお作りになった日本伝統芸能教場・鼓楽庵という団体がありますね。その団体は何か大きな会をなさったりするんですか？」

望月…「私が主催するとお祭りばかりになるんですけど…今度は、三月三日に『三番叟まつり&ひなまつり』っていうのをやるの。時事通信ホールで。これは、NPOで主催します。午前中練習してどなたでも参加できる曲もあります。今回は稀音家義丸先生、義之先生所蔵の雛人形、雛壇の展示をロビーでいたします」

奥田…「先生がNPOを立ち上げられたのですか？」

望月…「はい。日本音楽囃子文化研究会です。その他には、六月に太左衛門一門一如乃会定期演奏会と、夏は鼓楽庵ゆかたまつり、あと秋は自分の会・鼓楽公演だったり…」

奥田…「やはりご門弟のかたは女性の方が多いですか？」

望月…「最近ね、おじさま、及び男子も！（笑）第二の人生・日本文化に生きる道みたいの方もいます。うちはずっと変わってるんですよ。なにしろ一番古いお弟子さんがアメリカ人なので…」

奥田…「アメリカ人々？」

望月…「明日もそのアメリカ人のお弟子さんと一緒に行くのだけど、外国人向けの文化紹介に参ります」

奥田…「どこでなさるのですか？」

望月…「紫山会館」

奥田…「あつ。番町ですね。僕が新しく開いた事務所の近くです」

望月…「え、そうなの？」

## 対談の終わりに

望月…「ママがこの度、銀座囃子というのを始めたんです。銀座囃子は地域活性化のために鼓楽庵が始めました」

ママ…「必死にやっております」

望月…「上手いんですよ」

奥田…「あく、カンがよろしいようで」

望月…「美人ママに銀座囃子のゆるキャラになってもらって…それで、ここカフェ・ジュリエが今様の芝居茶屋、芝居を見たらここに寄って楽しんでいただく…というのが目標なの」

奥田…「いいですね。ママ、このお店はどのくらいやってらっしゃるのですか？」

ママ…「今二十八年目です」

望月…「ご主人が地元・銀座の方ですか」

奥田…「ママから見てどんな方ですか？太左衛門先生は」

ママ…「素晴らしい方です。でもとってもお茶目な…」

奥田…「チャーミングですよ」

望月…「お茶目っていうか…ありがとうございます！歌舞伎座の行き帰りにはぜひジュリエに寄ってね（笑顔で）」

奥田…「はい、是非」

望月…「お芝居が終わってパッと帰るにはもったいない。

じゃあどこに行く？っていう時に、男性だったらお酒を飲みに行くかもしれないけど、女性の方は、じゃあこちらでゆっくりお茶をというスペース。こちらジュリエは絶好のお店なので、いろんな方に知っていただきたい」

ママ…「メニュー以外にもこんなの食べたいなっていうのがあれば、できる限りの努力をします」

奥田…「いいですね。そういうお店好き。わがママが言えるお店好き」

ママ…「例えば、ランチのメニューにナポリタンはありませんが、もしお客様がナポリタン好きっていったら、トマトソースとお野菜があれば作れますので…」

奥田…望月…「ナポリタン！」

ママ…「オムライスが食べたいなって思ったらできますよ、卵がありますので（笑）」

一同…「笑」

奥田…「いや、先生。とても楽しい収録が出来たと思います！ありがとうございます！」

望月…「これでいいの？」

奥田…「いいです！」



## かみさまの四方山話 3

尺八演奏家 神令

### 「環境」

選ぶ、作る、楽しむ、これらは音楽と料理に共通しています。自分で作るのか、他人が作るのか。アマチュアが作るのか、プロが作るのか。ゆっくりと一人で楽しむのか、にぎやかに大勢の人と楽しむのかは人それぞれですが、楽しみ方は長い歳月を経て様々に変化しています。

一つの大きな変化は楽しむ環境です。音楽（飲食）産業の多様化は、近年より一層の広がりを見せており、「お一人様」から「ご家族様」まで対象は様々です。

音楽を聞く機械はラジオやテレビから、パソコンや携帯型の音楽プレーヤーへ取って代わり、CDやDVDは店頭で買うものでは無く、インターネット上からダウンロードして、場合によってコピー出来てしまう時代です。特に音楽を生業としていない一般の方（殆どの方ですね）などにとって、音楽は無料で楽しめる事が当たり前となってきているのが現状です。

もう一つの大きな変化は制作環境です。これは音楽機器の進化と、制作方法のあり方の変化が背景にあると考えられます。

いわゆる音楽的な専門教育を受けていないアマチュアの方もかなりの高品位な音楽を制作する事が出来る時代になってきています。コンピューターをある程度使えるようになると、必ずしも楽器を演奏出来なくてもなかなか面白い音楽を作る事が出来ます。もちろん、そこまで出来る人になると逆に専門的に音楽の勉強強される方が多いのですが、個人が楽しむというレベルでは十分に自己完結していま

す。さらにインターネットを通じて、これらを世界中の人々に公開することで、聞き手の反応を直接知る事も出来ます。これがインターネットの醍醐味の一つで、国立劇場や東京ドームを借りるよりも経済的です…

さて、これまでのお話はあまり邦楽とは縁のない話かとお思いでしょうが、実はこれらを理解した上で今後の邦楽がどうあるべきかを我々若い世代は考える必要を私自身は感じます。先人達により生み出され、紡がれてきた伝統音楽を現在どのような方法で表現するのか、それぞれが真剣に模索しています。さらにより一層の努力と工夫を求められていく未来が待っています。その未来に向けて日々精進するとともに、一般社会との交流も深めなければなりません。色々な形で味わってもらえる環境づくりも大切にしたいと思います。



### 邦楽英単語講座・その十五：お囃子

## hayashi music

Musical accompaniment by percussion and stringed instruments



Translated by noriko morikawa  
Illustration urara okuda

### ◎あともがき◎

日本人の食に対する欲望には限度がない。中華、イタリアン、フレンチにインド料理、韓国料理。世界中の料理がこれほどのレベルで食べられる国もないのかもしれない。その中でも、ここ十年でめざましい進歩を遂げているのがパン。郊外にもぞくぞくと行列のできるお店がオープンして、もはや天然酵母は当たり前。東京は十年後にはパリをしのぐようなパンの都市になるんじゃないだろうか。

しかし、まだまだパリにはかなわない。ホテルの近所のパン屋さんでバケットを買い、肉屋さんでハムを切ってもらって挟んで食べる。パリパリの皮を食べる贅沢は日本ではなかなか体験できない。何でも柔らかいのが好きな日本人はバケットもついつい柔らかくしてしまう。それはそれでいいのかもしれないが、口は脳に直結している。こんなに柔らかいものばかり食べていて、日本人は大丈夫なんだろうかと少し心配になってくる。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお